



下館駅前稻荷町通りに明治時代の画家青木繁の作品が飾られている。代表作である「海の幸」をはじめ、「大穴牟知命」^{おほあなむちのみこと}、「わだつみのいろこの宮」^{やまとのいろこのみや}、「日本武尊」など3か所に4作品が、半永久的に色褪せ^{いろあせ}ないセラミックアートで設置されている。これらは、稲荷町周辺の街並み環境整備事業の一環として、市が平成15年から平成18年にかけて整備した。

筑西市参与の石井正氏によると、本市にゆかりのある著名な芸術家をたたえるため、板谷波山記念館やしもだて美術館に続いて、より市民に親しんでもらえるよう、まちなか美術館を整備したという。

ようぜつ
天折の天才画家 青木繁。
あおきしげる。

知られざる筑西市との関係について紹介します。

ロマンスと筑西のかかわり
恋人と市内川島に滞在

青木繁は、明治15年に福岡県久留米の武士の長男として生まれた。代表作「海の幸」は国の重要文化財に指定され、美術の教科書にも掲載されている。28歳のとき肺結核により、その短い生涯を閉じている。

市内にある羽黒神社参道沿いの児童遊園の一角には、「青木繁の碑」がある。この碑は、昭和46年に青木繁建碑協賛会が没後60年を記念して建立したもので、その裏面には青木が川島地区に滞在したことが記されている。建設の企画者原蒼愁氏（徳持）によると、碑の表面の題字は、青木の美術学校の同級生で文化勲章を辞退した熊谷守一氏に依頼し、題字の下の短歌は青木の肉筆のものを

青木は、19歳で画家を志して上京し、東京美術学校入学の前年、洋画家小山正太郎の画塾「不同舎」に入門した。それから4年後、栃木県水橋村（現芳賀町）出身の福田たねが、絵の勉強のために上京して不同舎に入り、青木を知ることとなる。たねは初め青木の絵にあこがれ、やがて二人は、相思相愛の仲になっていったと言われている。



【福田たね】大恋愛の末に未婚のまま青木繁の子を出産。青木の代表的作品にはたねがモデルとして登場するものが多い。当時女性が一人で上京し、画家を目指すということは、大変稀有なことであった。

明治38年8月、23歳の青木は、20歳で臨月を迎えた恋人のたねを伴って市内川島を訪れた。たねの実家は芳賀町で呉服商を営んでいたが、未婚であるたねの懐妊を知った福田家は、世間体をはばかり、取引のある下館の間々田呉服店にたねの世話をお願いしたのである。同店の主人が当時の川島郵便局長池羽^{いけは}高之助氏と親しかったことから、地元の有力者であった池羽夫妻が二人の世話をした。

二人は、水戸線の川島駅に近い
たまのいりよしや
「玉乃井旅舎」に滞在。筑西市に滞
在したのは、たねの臨月であった8

月から、青木が実父の病氣のため九州に帰省する11月までの間と見られている。この期間に青木は鬼怒川の河原と川島郵便局の局長室で大作「大穴牟知命」を描いている。

この川島で、たねは青木の子
幸彦を生んでおり、この子が後の音
楽家福田蘭童である。まだテレビの
ない私たちの小学生時代、NHKの
ラジオ放送で福田蘭童作曲のテーマ
ソングで始まる「笛吹童子」は、悪
ガキをとりこにしたものだ。前述の
羽黒神社わきの石碑の裏面に記され
た川島滞在の書は、子息福田蘭童の
肉筆によるもので、碑の除幕式にも
出席している。また、蘭童の子は、
クレージーキャッツにいたピアニス
トの石橋エタローで、青木繁の孫
に当たる。芸術家の資質は、連綿と
受け継がれているのである。



【福田蘭童】2歳で父と死別。青木繁とたねは、正式に結婚していなかったため、出生届はたねの弟として提出された。母方の実家に預けられて育った。